

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL. 01088)

「新しい文明」の萌芽を探る
—日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどる—

(思想・文学分野)

手塚治虫と「メタモルフォーゼ」
—『ファウスト』『メトロポリス』から
「人工生命体」への地平へ—

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2021年9月16日開催の第88回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

「新しい文明」の萌芽を探る

— 日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどる —

手塚治虫と「メタモルフォーゼ」 — 『ファウスト』『メトロポリス』から 「人工生命体」への地平へ —

もし仮に、手塚治虫の代表作を『鉄腕アトム』と『火の鳥』とすると、前者は「ロボット」マンガで、後者は変身（メタモルフォーゼ）のマンガとみなされ、そうすると「ロボット」は鋼鉄の機械で、「火の鳥」のように「変身」できないもので、二つの代表作は、およそ正反対の主人公を描いていたかのようにみられてきたと思う。でも、手塚治虫全作品の原点とも言える初期の優れた作品『メトロポリス』では、「アトム」のように空を自在に飛べる「ミッチィ」が「人工細胞」から作られた「人工生命型ロボット」としてでてくる。ここに手塚治虫特有の「人工細胞」というイメージが出てきて、それがまるで「iPS細胞」でつくる「変身（メタモルフォーゼ）するロボット」のような特殊なイメージとして発展させられていく。後の『仮面ライダー』や『エヴァンゲリオン』にも通じる半生物ロボットで、ゲーテの『ファウスト』で言及される「ホムンクルス」にも通じるような「人工生命設定」である。この「変身（メタモルフォーゼ）するロボット」というイメージの現代的な広がり方について考えてゆけたらと思っている。

村瀬 学 (Manabu MURASE)

1949年京都府に生まれる。1972年同志社大学文学部卒業。1995年同志社女子大学生生活科学部人間生活科助教授（児童文化）2000年、同志社女子大学生生活科学部人間生活科教授。2020年退職。同志社女子大学名誉教授。

主な著書に、『初期心的現象の世界』『理解のおくれの本質』『「いのち」論のはじまり』『「いのち」論のひろげ』『13歳論』『「食べる」思想』『10代の真ん中で』『自閉症』『宮崎駿の「深み」へ』『宮崎駿再考』『徹底検証 古事記』『古事記の根源へ』『鶴見俊輔』『君たちはどう生きるか』に異論あり』『いじめの解決 教室に広場を』などがある。



目次

はじめに — 話したいこと

I 「メタモルフォーゼ」とは

- (1) 手塚治虫とは誰だったのかという問い
- (2) 二つの変身
 - ① 「変身」「変態」
 - ② もう一つの「変身」

II 手塚治虫の初期の作品から

- (1) 3大名作の誕生
- (2) 手塚治虫に影響を及ぼした「ジャングルもの」
- (3) 『ジャングル大帝』とは

III 「ジャングル」とは何か

- (1) 手塚治虫の考えようとした「ジャングル」とは
- (2) 「ジャングル」の進化
 - ① 進化の二つのイメージ
 - ② 多能性幹細胞は小さな「ジャングル」
- (3) ゲーテの時代の「変身」の一般のイメージ

IV ゲーテの『ファウスト』の世界の現代性

- (1) キリスト教世界と「ワルプルギスの夜」
- (2) 二つの「ワルプルギスの夜」のメタモルフォーゼ

V 『ジャングル大帝』と『風の谷のナウシカ』の近さ

VI 「腐海」のモデル水俣の世界

- (1) 水俣のメタモルフォーゼ

VII 『鉄腕アトム』と『メトロポリス』

- (1) 漫画『メトロポリス』(1949年)
- (2) アニメ『メトロポリス』(2001年)
- (3) 映画『メトロポリス』(1927年)

VIII 進化の過程：爆発的なメタモルフォーゼが起きたカンブリア紀

IX まとめ

質疑応答

2021年9月16日開催

第88回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：手塚治虫と「メタモルフォーゼ」

—『ファウスト』『メトロポリス』から「人工生命体」への地平へ—

講演者：村瀬 学（同志社女子大学名誉教授）

(文中敬称略)

はじめに — 話したいこと

本日の講演は、手塚治虫と『ファウスト』をうまくつなげて話したいと思っているが、そのなかでも「メタモルフォーゼ」について考えることが中心のテーマなので、最初から最後まで「メタモルフォーゼ」について話すことになると思う。

『火の鳥』など、手塚治虫の代表作はたくさんあるが、物語をたどって話をするには時間が足りないので、まず、手塚治虫が初期の頃に何をしようとしていたのかということをおとさんと一緒に考え、若い頃から『ファウスト』を読み、それを漫画にしていたという手塚治虫のゲーテとの接点も見していきたい。そして、私が手塚治虫の最大の代表作のひとつと考えている『ジャングル大帝』について話したいと思っている。

『ジャングル大帝』は、大人の読者にとっては子どもっぽい漫画のように思われるかもしれないが、じつはそうではない。そこで、それが宮崎駿の『風の谷のナウシカ』ととても似ているところがあることについて説明し、そして、『風の谷のナウシカ』の中に出てくる「腐海」のモデルが、じつは『ジャングル大帝』とつながっていることを紹介して、全体のまとめに入っていきたいと思う。

Ⅰ 「メタモルフォーゼ」とは

(1) 手塚治虫とは誰だったのかという問い

手塚治虫が亡くなったのは1989年2月9日である。翌日の朝日新聞には、その後、多くの人引用する有名な「伝説の社説」が掲載されたが、そこには、「日本人は、なぜこんなにも漫画が好きなのか。

(略)なぜ外国の人はこれまで漫画を読まずにいたのだろうか。答えの一つは、彼らの国に手塚治虫がいなかったからだ」と書かれていた。

「手塚治虫がいなかったから」という説明に対しては、「本当にそうなのか」と不思議に思う人もいると思う。そこで、この社説が言おうとしていることをきちんとたどりたいが、そうすると「手塚治虫とは誰だったのか」という問いに直面する。「手塚治虫とは誰だったのか」という問いに対する答え方はたくさんあるが、本日私は、それを手塚治虫の「メタモルフォーゼ観」にあると考えて話をさせていただく。



手塚治虫(1928-1989)
/Mutaito890,CC BY-SA 4.0 ,via Wikimedia Commons

(2) 二つの変身

「メタモルフォーゼ」は、広辞苑で調べると「変身」「変態」という二つの言葉で説明されている。広辞苑の一番新しい版には、本当にこの二つの言葉が載っているだけである。

では「メタモルフォーゼ」とは「変身」なのかということになるが、ただ「変身」と言ってしまうと本当のイメージが上手く伝わりにくいので、先に「変身」の話をしたい。

① 「変身」「変態」

「変身」は2通りある。一つは、「元の姿」があって、別に「変身する姿」があるというもので、『仮面ライダー』がその例となる。この物語は、本郷猛という人物がショッカーに改造されて仮面ライダーに変身するが、そのように「元の姿」から別の姿に「変身する」というのが、多くの人が「変身」という言葉に対して持っているイメージだと思う。

『スーパーマン』も同様である。遠くの星から来たスーパーマンが、普段はクラーク・ケントという新聞記者の姿で、事件が起こるとスーパーマンに変身する。スーパーマンが「変身」なのか、クラーク・ケントが「変身」なのかは分からないが、そういう「変身」がある。

あるいは、「変態」という言葉は、『はらぺこあおむし』で青虫がサナギになって蝶になることと説明される。これは昆虫の「変態」だが、これも「メタモルフォーゼ」であると広辞苑では説明している。

② もう一つの「変身」

ところが、私が本日話をしたい「変身」は、そういう「変身」ではなく、もう一つの「変身」である。それは「元の姿」があって別のものに「変身」するのではなく、そもそも根本に「変身」があって、その「変身」がまた「変身」していく。「元の姿」はなくて、どこまで行っても「変身の姿」があるというあり方である。

例えば、これを渦巻の図で描くと、中心に「変身」を生む「変身」がある。その「変身」から「変身」が生まれるという図。したがって、二つ目の「変身」は「ラセンの変身」と言ってもいいかもしれない。それを私は「メタモルフォーゼ」と呼びたいと思う。

II 手塚治虫の初期の作品から

(1) 3大名作の誕生

最初に、手塚治虫の初期の作品をしてみる。

『別冊 太陽』が発行した『手塚治虫マンガ大全』という、手塚治虫の軌跡を細かく追って紹介したとても良い冊子があるが、その最初は「赤本からのスタート」と書かれており、これによると、手塚治虫は21歳のときに『メトロポリス』という作品を描いている。そして22歳のときにゲーテの『ファウスト』を漫画化しており、それから『ジャングル大帝』が登場する。23歳のときに『鉄腕アトム』の基になった『アトム大使』を描き、25歳のと

きに『リボンの騎士』が登場する。ここから、手塚治虫の3大名作と言われる『ジャングル大帝』『鉄腕アトム』『リボンの騎士』はすでに25歳までに作られていたことがわかる。

(2) 手塚治虫に影響を及ぼした「ジャングルもの」

ただ、本日話したいのは、21歳の手前、20歳あるいは10代後半に彼が何を描いていたのかということである。手塚治虫は19歳だった1947年に『新宝島』を描くが、その後に『キングコング』や『ジャングル魔境』などの「ジャングルもの」が出てくる。今の若い人は「ジャングルもの」と言われても分からないようだが、戦争中、あるいは戦争が終わった頃、日本ではたくさんの「ジャングルもの」が作られた。手塚治虫もそれを見て育っているので、手塚治虫の中で「ジャングルを描く」ということは、当たり前要件としてあったように思う。



『新世紀少年密林大画報』
(別冊太陽)／平凡社

「ジャングルもの」については、もう戦前、戦時中の作品を見る機会はないが、『別冊 太陽』から出た『新世紀少年密林大画報』という冊子には、戦前や戦中に描かれた原画が数多く紹介されている。これは必見である。この中には『バルーバの冒険』等、いろいろな人の作品があり、『密林の王者ターザン』や『ジャングルの少年』『ターザンの世界』などもあるが、その中で戦後生まれの私も知っているのは、山川惣治の『少年王者』や『少年ケニヤ』である。『少年ケニヤ』はアニメにもなっている。1960年～70年にかけては、まだこのような「ジャングルもの」があった。

したがって、このような作品を読んで、手塚治虫は『ジャングル大帝』を描いたと言える。ある意味では『ジャングル大帝』は、手塚治虫の独創性が発揮された作品ではなく、いろいろな人が描いていた「ジャングルもの」を彼も描いたということになる。

ところが、他の人の作品とは徹底的に違うところがあった。それは動物の見方である。それが「メタモルフォーゼ」に関わる見方であり、その点にこだわりながら彼は今までと違うジャングルを描き始めたのである。

(3) 『ジャングル大帝』とは

『ジャングル大帝』はアニメ化されたのでご存知の方もおられると思うが、少しだけストーリーを紹介したい。

ジャングルに白いライオン・パンジャが王として活躍している。しかし、人間がジャングルに進出し、妻のエライザが捕らわれてしまう。それを助けようとしてパンジャは殺されてしまう。エライザはヨーロッパへ連れて行かれることになり、船の上でパンジャと同じ白いライオンのレオを出産する。そして、レオに「ジャングルへ帰れ」と言って海へ逃がす。

レオはジャングルに戻る途中で、ケンイチという人間に会い、人間の言葉を学んでジャングルに戻る。レオは人間から学んだ文化を活かして、弱肉強食のジャングルで食べられてし

もう動物を助けるために、人間の知恵を活かした活動をする。これは奇妙な活動で、私は若い頃にこれを読んで「レオは何て変なことを考えるのだろうか」と思った。つまり、レオはジャングルの動物たちに「これからは弱肉強食ではいけない」と言い、動物たちから「何を食べればいいのか」と聞かれると、「畑を作ろう」と言って畑を耕すのである。そういうシーンがある。植物を植えて、皆でそれを育てて食べようというわけで、私はそれを見て「それで肉食の動物が満足するのか」と疑問に思った。

話が逸れるが、じつは今、大豆を潰して肉に加工する代替肉の技術が発展している。同志社大学でも、同志社女子大学も同じだが、週に1回代替肉を使ったカレーを提供する日がある。それで、学生たちに「代替肉のカレーを食べよう」と言うと、「代替肉があり得るのか」「大豆から肉を作れるのか」と訝しがるが、実際に食べると「本物の肉と全く変わらなかった」という感想が出てくる。最近になってそのように代替肉を作れることが分かってきたので、すでに『ジャングル大帝』の中でそういう発想につながるものが予感されていたとも言える。



『ジャングル大帝(1)』
(手塚治虫文庫全集)
文庫／講談社コミック
リエイト

第2部では、ジャングルに帰ったレオは、結婚してルネとルッキオという子どもを持つ。そして、ジャングルの動物たちを守るために働くことになるが、「死斑病」という今のコロナのような疫病が蔓延し、動物たちは次々に倒れていく。その中でレオの妻のライヤも死んでしまう。息子のルネも病に罹るが、そのときにアルベルトという人間の医者が来て注射をして助けてくれる。それに感激したレオは、「人間と一緒にやっていくのは無駄ではない」と知ることになる。

そしてレオは、「月光石」というウランのようなものを採掘しようとムーン山へ行く人間たちに同行し、吹雪に遭い、ヒゲ親父と2人きりになって凍死の危機に瀕してしまう。その中で、レオはヒゲ親父に「自分を殺して肉を食べ、毛皮を着て生き延びてくれ」と言い、壮絶な死を遂げる。これで『ジャングル大帝』はほぼ終わり、その後の息子ルネの活躍は、付け足された本と付け足されていない本がある。

このように、この物語の中心的存在はレオであり、レオが人間の世界とジャングル・動物の世界をつないで共存のために知恵を働かせるという話が展開される。これをアニメで見たり、あるいは大人が見ると、手塚治虫がユートピアのようなあり得ないことを描いていると思われ、「子ども向けだから仕方がない」と低く見做されてきた部分がある。そういう話である。

III 「ジャングル」とは何か

(1) 手塚治虫の考えようとした「ジャングル」とは

そこで問題となるのは、手塚治虫が描こうとした「ジャングル」とは何か、どのように考

えたらいいかということである。

広辞苑によると、「ジャングル」は「主に熱帯の高温多雨の地にある、繁茂した草木におおわれた地。密林」と説明されており、動物についてはあまり説明されていない。広辞苑の説明がこれでいいのかと思うが、それは別として、一般に人々が思う「ジャングル」とは弱肉強食の世界で、強くて獰猛な肉食系の生き物と、おとなしい草食系の生き物が入り混じって棲んでいるような世界である。そして、「ジャングル」から「文明社会」へと、進化の中で段々と高度な知能を持った生き物が生まれてきた。その大元に「ジャングル」というものがあると説明され、子どもたちもそのように教えられて理解してきたと思う。

ところが、手塚治虫が描いている「ジャングル」は、広辞苑や一般で説明されているような世界とは違う世界である。きちんと読むと、驚くような描き方をしているところがある。

高校の理科のサブテキストの写真を見ていただくと、世界中には本当にたくさんの生き物がいて、どれだけ見ても見飽きないほどである。このような優れたサブテキストが数多く出版されており、私は大好きでいつも見ているが、そのように多様な生き物が棲んでいるところが「ジャングル」である。

では、手塚治虫が捉えようとした「ジャングル」は、どのように説明したらいいのか。手塚治虫は「生命はメタモルフォーゼだ」と言っている。これは前述のように、第2の変身、あるいは変態としての「メタモルフォーゼ」である。生命とは「下等」から「上級」への進化ではなく、生き物の多様な姿を温存しているところが「ジャングル」だと彼は考えようとしている。つまり、すべての生き物をつながっているように見ようということであり、すべての命を優劣では見ないようにしている「ジャングル観」がある。ここはとても大事なところであり、普通の「ジャングル」という見方で見てはならないところである。そこを外して「ジャングル」を見てしまうと、『ジャングル大帝』は平凡な子ども向けの物語に見えてしまうと思う。

そういう生命の進化の中に「カンブリア紀」が出てくる。「カンブリア紀」は歴史上でさまざまな形をした生き物が爆発的に出現した時期だが、これも「ジャングル」という手塚治虫が言う「メタモルフォーゼ」が爆発したような時期と考えることができる。

そして、ヨーロッパ人がヨーロッパに「ジャングル」を持ち込もうとした時期が現れる。「動物園」の創出である。ウィーンにシェンブル禽獣園という最古の動物園ができるのが1752年であり、このときゲートは3歳なので動物園に行ったと思われる。ゲートはたくさんの動物の骨格を模写しているが、動物園がなければ、恐らくゲートは動物のことをあまり知ることができなかったと思う。そのように、動物園はとても大事な役割を果たしてきている。この大事な「動物園」にも行けない子どものために、手塚は「紙の上」に「動物の世界＝ジャングル」を創ろうとしたと言えるかと思う。

このように、新しい視点で見られる「ジャングル」の下で描かれた「ジャングル」から『ジャングル大帝』の持つ位置の重要性が出てくる。

(2) 「ジャングル」の進化

① 進化の二つのイメージ

高校の理科のサブテキストには、まず大腸菌やバクテリア、ウイルスなどがいて、それがアメーバやゾウリムシ、あるいは爬虫類、植物等へと扇形に広がっていく図が描かれている。このような説明の仕方はいいと思う。つまり、進化を「劣から優への変身」と見るか、扇形のように広がる「ラセンの変身」と見るかによって、進化の見方が違って来るからだ。

今はウイルスが蔓延していて、ウイルスの見方がいろいろと言われるが、「ウイルスは生物ではない」と説明する科学者がかなりいるのは残念に思う。ウイルスはとても賢くて、大きな動物がするようなことをちゃっかりとやってのけている。それも「劣から優への変身」という見方をすると、「ウイルスは生命ではない」と取るに足らない生き物のように見られてしまうと思うが、それは良くないと思う。

前述したヨーロッパに動物園ができる過程は、じつは大航海時代から始まっている。1400年代にヨーロッパ人が大航海に出て、新大陸を発見し、ジャングルを発見し、未知の動物を発見してヨーロッパに持ち帰る。特に貴族は、まず自宅の庭園の中に植物園を造り、そして禽獣園という動物園を造り始める。キリスト教の教えに則って、動物園をノアの箱舟のように考えたのかもしれない。そこで、未知の生き物を低俗な生き物であるかのように捉えて「動物園で動物を見る」ということが始まる。

そういうところから「劣から優への変身」と「ラセンの変身」という進化の二つのイメージが出てくる。これを踏まえて、手塚治虫の話に入っていきたい。

② 多能性幹細胞は小さな「ジャングル」

先日、珍しい新聞記事が掲載されたので、先にそれを紹介する。9月8日の新聞記事で、「ES細胞から精子が作られる」という内容である。世の中には不妊の人、精子がうまく作られない人、卵子がうまく作られない人などがいるが、ここでは精子がES細胞から作られたことを紹介しているので、うまく精子が作られない夫側にとっては大変な朗報だと思う。

これは、細胞胚性幹細胞という、いろいろな細胞になる大元の細胞、つまり「メタモルフォーゼをする細胞」による。多能性幹細胞とも呼ばれる、いろいろな能力を持った細胞で、ES細胞とも言うが、培養すると筋肉ができたり、血液ができたりする。それで精子を作ったわけだが、身体の中で作られる精子や卵子が、幹細胞を操作して作られるようになったということである。同様に、ヒトの耳ができる細胞をネズミの幹細胞に埋め込むと、背中に耳のあるネズミを作ることもできる。

つまり、幹細胞は「メタモルフォーゼ」でいろいろなものに変身する細胞であり、変身の過程をいろいろなところに埋め込むと、いろいろに変身する姿で生き物が生まれてくる、そういうことができるということである。

言い換えると、多能性幹細胞(ES 細胞)はそれ自体で「小さなジャングル」と言うことができる。そして、多能性幹細胞(ES 細胞)の、何にでも変身する性質は科学的な言い方で、これを人文の言葉で言うと「想像する力」になる。

生き物はすべて「想像する力」を持って生きているので、生き物の姿は想像したようになっていく。例えば、敵が現れて、それを倒したいと思うと、角が生えたり、牙が生えたり、爪が生えたりしてくる。それが「想像する力」であり、あるいは「イメージする」ということになる。じつは、そういう言い方は人文の言葉である。科学者はそのように表現しない。

「細胞が想像力を持っている」とか「イメージを持っている」とは言わず、「多能性の繁殖力を持っている」と言うが、私は人文系人間なので人文の言葉で多能性幹細胞を説明してもいいのではと思う。

手塚治虫は、じつはこの多能性幹細胞を自分の中で「メタモルフォーゼ」「ラセンの変身をする力」として捉え、想像力を発揮してたくさんの物語を創ってゆかれた。

(3) ゲーテの時代の「変身」の一般のイメージ

ここまで2通りの「変身」について説明した。「正常」あるいは「元の姿」というものがあって、それが変身するというのが一般の見方だが、手塚治虫の見方はそうではなく、根本に多様性があり、小さな「ジャングル」があって、それが変身したり、変形したりすると考えてゆかれた。これがじつは、ゲーテにとっても近い。



ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749–1832) /ヨーゼフ・カール・シュティラー,
Public domain, via
Wikimedia Commons

ゲーテの時代の「変身」のイメージは、キリスト教の信仰者の姿が一番美しく、キリスト教から外れると異教・異端、あるいは獣になると見られていた。つまり、キリスト教では、一つ目の変身の姿として「変身」を考えていたと言える。中心にキリスト教があると、それは正常であり、そこから外れると異常なもの、墮落したもの、気が狂ったもの、愚かなもの、魔物、悪人、病を持つものなどが生まれてくると考えられた。あるいはグロテスク・醜い・奇形と呼ばれるものが生まれてくるとされた。それは信仰者にとって大変に怖いイメージであり、信仰を無くすとそうになってしまうと思われていた。

ところが、それに対して、ゲーテは「本当にそうなのか。真ん中に正常とされるものがあって、他はすべて変身なのか」と考えたのである。

IV ゲーテの『ファウスト』の世界の現代性

(1) キリスト教世界と「ワルプルギスの夜」

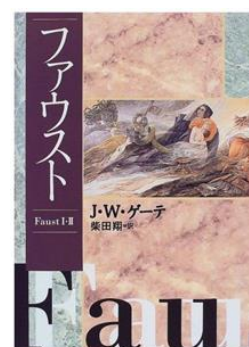
そして、『ファウスト』の世界に入る。手塚治虫は21歳のときに、すでに『ファウスト』をアニメにしている。これはとてもおもしろい作品である。皆さんは、ゲーテの『ファウスト』と比べて「これは何なのか」と思われるかもしれないが、手塚治虫は大事なところはきちんと拾っている。それは何かということについて、ゲーテの『ファウスト』の世界の「ここだけを押さえればいい」というところを説明したい。

じつはゲーテの『ファウスト』の第1部は、ファウストが「世の中でいろいろと勉強してきたが、真理を得ることができなかった」と思っているところへ、メフィストフェレスが現れて「あなたの知らないおもしろい世界があるから、連れて行ってあげよう」と言い、異教徒や魔女が集まる宴の場である北欧の「ワルプルギスの夜」にファウストを連れて行く話になっている。これは非常に大事な設定である。なぜゲーテが「ワルプルギスの夜」を設定したかというところには異教の世界があって、確かにおどろおどろしいが、キリスト教とは違う世界があることをファウストは知ることになるからである。これが第1部である。

もちろん第1部の多くの部分はグレートヒェンとの物語であり、ファウストが美しい娘に一目惚れをして、彼女を妊娠させてしまうという話である。そして、結婚もしていないのに身籠ったため、グレートヒェンは罪人にされ、裁判にかけられて死刑になってしまう。これは実際にあった事を基にゲーテが物語にしたもので、普通、『ファウスト』と言えば、そちらの方がメインで解説される。確かにそれも大事な話ではあるが、私はここで「ワルプルギスの夜」の意味を考えてもらいたいと思っている。

第2部は、ワグナーという医者を作ったホムンクルスという人工生命体が、ファウストを古代ギリシャの「ワルプルギスの夜」に誘う。そこには驚くような姿形の神々がたくさんいて、それをゲーテに見せる。

じつは、この北欧と古代ギリシャの二つの「ワルプルギスの夜」が「メタモルフォーゼ」の世界である。それをキリスト教は邪悪な世界として描いているが、「本当にそうなのだろうか」と、ゲーテはこの二つの世界をもう一度見直すように描いている。これがとても大事である。ファウストがいくら勉強しても真実を得られなかったのは何故かというところ、キリスト教中心の世界が正常で、そこにすべてがあると思っていたからではないか、そういう勉強の仕方が間違っていたのではないか、もっと他の世界も含めて考えなければ、ものの見方を間違ってしまうのではないかという思いが生まれていたからである。しかし、そういうことを言うと非キリスト者と見られてしまうので、それを大きな声では言うことはできない。



『ファウスト』単行本
(1999/9/1)
J.W.ゲーテ(著), Johann
Wolfgang Goethe(原名)
柴田 翔(翻訳)/講談社

そこに案内してくれるのが、第1部はメフィストフェレスであり、第2部は人工生命体(ホムンクルス)である。この人工生命体が異端の世界とキリスト教の世界をつなぐとても大事な役割をしている。ホムンクルスは、ビーカーの中でしか生きられない生命体のように思われて、未熟なイメージがあるが、そうではない。実際に読むと、ホムンクルスはとてもおしゃべりである。つまり、「ワルプルギスの夜」に行くためには、キリスト教世界ではないものが誘ってくれなければならないので、そういう世界を表すために、このおしゃべりの人工生命体は作られているのである。

そもそもキリスト教では、生命は神しかつくり出せない。それに反して、ゲーテは、人間が人工生命体を作るという設定をしている。これは凄いことだが、敢えてそうしなければ「ワルプルギスの夜」の世界には行けないと見込んで、彼はこういう設定をしたのである。

(2) 二つの「ワルプルギスの夜」のメタモルフォーゼ

まず、北欧の「ワルプルギスの夜」の挿絵を見ると、様々な人が集まっている。ここには確かにおどろおどろしいけれども、人々を魅了して止まない世界がある。そこには妖精や魔法使いなどがいるが、最近で言えば「ハリーポッターの世界」と言える。「ハリーポッターの世界」がなぜあのように世界中の子どもたちに人気があるのかというと、キリスト教では



ワルプルギスの夜
『ファウスト』
Public domain, via
Wikimedia Commons

邪険にされる魔法の世界、魔物の世界を「これほど凄いのか」と思わせてくれた物語だからである。ある種の「ワルプルギスの夜」を表したと思ってもらってもいいと思う。

今でもこの「ワルプルギスの夜」は、例えばハロウィンの祭りや5月の火祭りとして表されている。冬の時代から春の時代に移るとき、春をもたらしてくれる神々を讃える祭りが「ワルプルギスの夜」なのである。日本でも「とんどさん」と言って12月に火祭りが全国で行われているが、同じようなことをヨーロッパで行っていたものと思われる。挿絵をよく見ると、いろいろな動物が蠢いている様子が分かる。これは大事な挿絵である。

もう一つ、古代ギリシャの「ワルプルギスの夜」に現れる様々な生き物の図版がある。ギリシャ神話では、羽の生えたライオンや尻尾のある蛇のような人間のような姿、角のある人間など、いろいろな姿の生き物が描かれている。これは何なのか、空想の世界なのか。進化のなかでカンブリア紀があったと前述したが、カンブリア紀に生まれた生き物はほとんどがこのような生き物である。挿絵に描かれている図は人間の想像力によるものだが、じつはカンブリア紀には、人文の言葉で言う「想像力」が作り出した生命の姿がたくさんあった。こういう「ワルプルギスの夜」に現れる様々な奇妙でグロテスクな生き物を考えようとすると、じつは生命の源を考えなければならなくなるということである。

V 『ジャングル大帝』と『風の谷のナウシカ』の近さ

そして『ジャングル大帝』が描かれることになるが、「ジャングル」はそういう不思議な生命体を体感させてくれる世界として描かれる。しかし、人間の世界からジャングルの世界に行くためには「媒介＝仲介者」が必要なので、それが「レオ」という白いライオンとして設定される。

『ジャングル大帝』の後、登場するのが宮崎駿である。じつは、宮崎駿は手塚治虫を嫌っている。それにも関わらず、彼が描いた『風の谷のナウシカ』は、(同じように)人間の世界から、不気味な生き物がいる「ワルプルギスの夜」のような、あるいはカンブリア紀のような、「腐海」と呼ばれる世界へ行くという話になっている。その媒介になるのが「ナウシカ」である。

つまり、『ジャングル大帝』の「レオ」と『風の谷のナウシカ』の「ナウシカ」は、よく似た「仲介者」の位置を占めている。それは恐らく、宮崎駿の生命観と手塚治虫の生命観がどこかでシンクロして近い部分があったからではないかと思われる。



王蟲と対峙するナウシカ『風の谷のナウシカ』
© 1984 Hayao Miyazaki/Studio Ghibli, H

VI 「腐海」のモデル水俣の世界



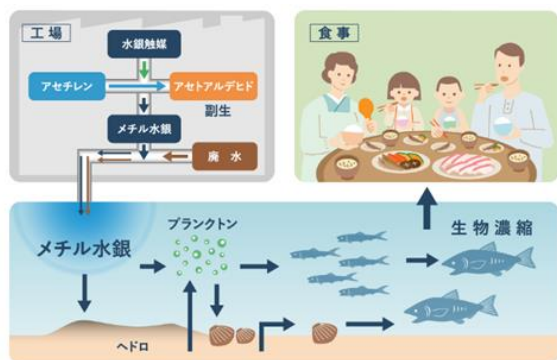
腐海『風の谷のナウシカ』
© 1984 Hayao Miyazaki/Studio Ghibli, H

『風の谷のナウシカ』でも行われる。火で焼き尽くそうとし、そこに巨大な生き物が出てくる。『ジャングル大帝』は、ゾウやムーン山でマンモスが出てきてその場を救ってくれるが、『風の谷のナウシカ』では王蟲（オーム）が登場する。このように巨大な生き物が出てくる場所もよく似ている。

(1) 水俣のメタモルフォーゼ

『風の谷のナウシカ』については、私は現代的だと思っているが、「腐海」にモデルがあったのは有名な話である。

ご存知ない方のために説明すると、「腐海」のモデルは熊本の水俣である。水俣市は不知火海に面しているが、ここにチッソという水銀を作る工場があり、その工場排水が不知火海の南に位置する水俣湾に流れ込んだために、そこで獲れた魚を食べた人たちが水銀中毒となり、「水俣病」と呼ばれる奇病にかかった。そういう苦難の病の世界があり、じつはこれが「腐海」のモデルとなっている。それが今はきれいな海になり、浄化されることをのちの宮崎駿は知って、恐ろしい生き物がいるけれども、じつはこの「腐海」は世界の毒を浄化してくれている世界でもあるということを考えて『風の谷のナウシカ』を作ったのである。



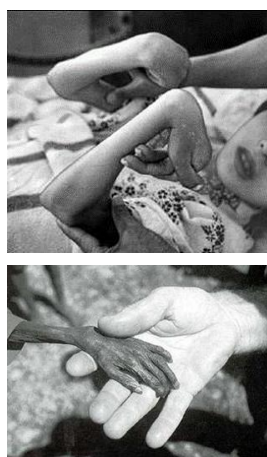
水俣病／出典：環境省水俣病情報センター

水俣病は、海中に流出した有機水銀を貝などの小さな生き物が食べ、その小さな生き物を魚が食べ、その魚を人間が食べて中毒を起こす神経疾患で、特に胎児が先に侵されていくという病だった。

生命体は「メタモルフォーゼ＝変身」をするが、「変身」によって自分を防御しており、そこに必要性があるから「変身する」わけである。角が生えたり、多くの手足がで

きたりするの、必要だからである。したがって、水銀が体内に取り込まれると、胎児はそれに対抗し、変形して防衛しようとするが、対抗できなかった胎児は流産で死んでしまう。生き残った胎児は奇形で出産される。

変身した子どもたちの写真（スライド）を見ていただきたい。これに寄り添ったのが『苦海浄土』を書かれた石牟礼道子さんだが、彼女も最後には水銀に侵されて麻痺していく。これらの写真は『水俣・東京展』という雑誌から紹介しているが、そこには、彼らの異常に曲がった手も掲載されている。「水俣のピエタ像」と呼ばれる有名な写真もある。



水俣のピエタ像

『水俣・東京展』
出版：水俣・東京展実行委員会

VII 『鉄腕アトム』と『メトロポリス』

(1) 漫画『メトロポリス』(1949年)

本日、私は講演のサブタイトルに『鉄腕アトム』と『メトロポリス』を挙げた。『メトロポリス』は『ジャングル大帝』より以前に作られており、当時、手塚治虫は21歳で、『鉄腕アトム』は23歳のときの作品である。

簡単に『メトロポリス』の話を紹介すると、地上に大都会メトロポリスをつくっている人間がいて、その大都市を維持するために奴隷として地下に労働者が捕えられている。元々これはドイツの『メトロポリス』という映画を基に、手塚治虫が自分なりの『メトロポリス』という漫画を作ったので、映画と骨格は一緒である。

そして、大都会メトロポリスの地下にいる労働者を解放しようと動く者が出てくる。映画『メトロポリス』ではヴィーナスのような美しい女性が出てくるが、手塚治虫は「ミッチィ」という人造人間を作り出し、それが地上と地下の媒介役を担う。そういうものがなければ地下に入っていけない。それは、ホムンクルスという人工生命体が作られたのと全く同じ発想である。地上のメトロポリスで生きている人間が地下に行くためには、仕掛け=ものの考え方を変えるような大きな契機が要るので、それを人造人間として登場させていたのである。

これが『鉄腕アトム』になると、人間社会を支えるロボットの世界があって、それを媒介する者が「アトム大使」でのちに「鉄腕アトム」になっていく。そういうものが必要だったということである。

漫画の『メトロポリス』では、博士が人造人間を作っているシーンがあり、そしてロボットたちを解放しようと扇動するという物語が描かれている。



『鉄腕アトム(1)』
(手塚治虫文庫全集)文庫
／講談社コミッククリエイト

(2) アニメ『メトロポリス』(2001年)

じつは、手塚治虫の『メトロポリス』に感動したのが大友克洋で、りんたろうという監督と組んで『メトロポリス』というアニメを作っている。これは凄いアニメ作品で、全米でも評価されて満点評価の4つ星を与えられ、アニメ史上最高の傑作の一つと言われた。これはレンタルできるので、是非ご覧いただきたい。

ティマという少女の人工生命体が、地下の世界を解放しようとして動くという物語だが、手塚治虫がいなければできなかつた作品である。



『メトロポリス』
製作：2001年(日本)／配給：東宝
監督：りんたろう・大友克洋
原作：手塚治虫

(3) 映画『メトロポリス』(1927年)



映画『メトロポリス』の
マリア レプリカ
米国ペンシルバニア州
ピッツバーグ出身の
Jiuguang Wang,
CC BY-SA 2.0, via
Wikimedia Commons

映画『メトロポリス』は、ラング監督によるサイレント映画だが、近未来世界を描いた SF 映画黎明期の最高傑作とされている。「SF 映画の原点にして頂点」の作品と呼ばれた長編映画で、現在 150 分バージョンが復元されており、これもレンタルで見ることができる。

物語は、マリアという人物が媒介役を務めるが、そのマリアに似たロボットを作って労働者たちを扇動させるという内容で、共産主義の映画とされて批判されたが、上手く編集し直してよく分かるように作られている。

VIII 進化の過程：爆発的なメタモルフォーゼが起きたカンブリア紀

進化の過程で、前述のようにカンブリア紀には様々な形をした生き物がたくさん生まれた。これは生理学・分子学で科学的に説明されるところがあるが、我々は人文の言葉で「想像力がそうさせた」と言ってもいいと思ってきたところである。

『カンブリアンモンスター図鑑』
カンブリア爆発の不思議な生き物たち
秀和システム



IX まとめ

以上をまとめると、生命の根本に「メタモルフォーゼの核」とでも呼びうるものがあって、それが、多様な生き物の形を生み、人間を感じる狭い「美」の範囲からはほど遠い奇形、怪物、魔物、グロテスク、醜さと呼ばれるものを生んできた。そして、『美女と野獣』のようなテーマで、さまざまなバリエーションをもって物語化されてきた。「美女」が正常なものとして中心にあり、「野獣」はそこから離れた異端であるというように。

しかし、そうではなく、じつは、もっと根本に「メタモルフォーゼ」の核があるということを私は説明してきた。「不変で正常なもの」がどこかにあるわけではなく、生き物は常に「メタモルフォーゼ」として動いているという問題提起が、ゲートにも手塚治虫にもなされていたのではないかというのが本日の私の話である。我々も老いていくが、何が「不変で正常なもの」かは決まっているわけではないので、「古い」も新たな「メタモルフォーゼ」として見つめられてもいいと思う。

ゲートや手塚治虫や宮崎駿は、その「美女」と「野獣」の間の「橋渡し役」の存在をさまざまに工夫してきた。その一つが「ファウスト」や「アトム」「火の鳥」、あるいは「ナウシカ」だったのではないかということである。

そして、この「メタモルフォーゼ」への関心を元に、「ジャングル」や「動物園」と呼ば

れてきたものを是非見直していただきたいと思ってきた。「コロナ・ウイルス」までもそのような視線でとらえると、また違った見え方ができるのではないかと思う。

最初に朝日新聞の「日本人は、なぜこんなにも漫画が好きなのか。(略)なぜ外国の人はこれまで漫画を読まずにいたのだろうか。答えの一つは、彼らの国に手塚治虫がいなかったからだ」という社説を掲げたが、この社説は正しかったのか。手塚治虫がいたから日本人が漫画を好きになったという説明でいいのだろうか。

そもそも「手塚治虫とは何だったのか」という問題が問われるべきであり、「手塚治虫とは誰だったのか」を問おうとすると、それは手塚治虫の「メタモルフォーゼ観」を問うことであったと言える。それがゲートから続いてきた問題提起だったと私は考えた。

生命の根本にメタモルフォーゼの核を据えるということは、生命に優劣を付けるという発想ではなく、生命のつながりを考えることになる。つながりとは誤解されやすい言葉だが、万物は八百万の姿に分かれて生きてきたと考えてもいい。男と女の間は手塚治虫にとってはごく自然な対等なことであり、それが表されるのが『リボンの騎士』である。『リボンの騎士』は主人公が男でもあり、女でもあるという世界だが、そういう世界を描けるのは、じつは生命が優劣ではなく、連続的につながり、対等性だという考えがあったからである。そして、動物や化け物も、すべてに対等性がある。「対等性」とは「同じ」ということではない、「メタモルフォーゼ」を通してつながっているのではないかということである。

そういう生命の連続性を考えることは、ある意味では、自然と「輪廻」のような「命の巡り」を考えることになる。したがって、『火の鳥』が生まれるのは当然のことであり、そういう汎神論的、アニミズム的な考えは、一神教のキリスト教からはなかなか生まれえないもの、大変に遠いものとしてあったのではないかと思われる。だからこそ、外国には手塚治虫が描くような漫画は生まれなかったし、手塚治虫は生まれなかったのである。

つまり、キリスト教の世界に手塚治虫は生まれず、東洋に生まれたということで、仏教的なもの、あるいは「輪廻」を考える、生命が巡っていることを考える世界に手塚が着目し、そこに想像力を活かして物語を作り、そこに手塚の天才性が花開いたということである。そういう意味で、仏教への近さは、大変な詩や童話をたくさん残した宮沢賢治に似ているところがあると思う。そのことをお伝えして、話に代えさせていただければと思う。

質疑応答

- Q1 「媒介者」のイメージは「スペクトラム」の方が合うのではないか
 - Q2 レオの農業革命は、生命として正しい方向なのか
 - Q3 戦争体験が薄れる中で、想像性を発揮する作品は生まれるのか
 - Q4 IPS 細胞の技術の基準は多様化するのか、収斂していくのか
 - Q5 『鬼滅の刃』も日本的な発想のアニメだが、どのように感じられるか
 - Q6 アニメの奔放なストーリーは『古事記』に関係があるのか
 - Q7 ポストコロナ、アフターコロナで、本当のアーティストや芸術家は出現するのか
 - Q8 科学と芸術の関係をどのように捉えているのか
 - Q9 パラリンピックの選手をアスリートとして受け止められるか、どう感じるか
- <補足説明>
- <著書の紹介>

Q1 「媒介者」のイメージは「スペクトラム」の方が合うのではないか

多様性をつなぐ用語として「メタモルフォーゼ」の他に「スペクトラム」や「モーフィング」があるが、「媒介者」というイメージは「スペクトラム」などの方が合うのではないか。

(村瀬)

難しい質問だが、私が今回「メタモルフォーゼ」という言葉にこだわったのは、ゲーテがそういうことを中心に考えていたことと、手塚治虫が「メタモルフォーゼ」を漫画のタイトルにも使っているからである。

「メタモルフォーゼ」「変身」という用語は生命体に使われることが多く「スペクトラム(連続体)」や「モーフィング(変形技法)」という用語は主に映像加工技術で使われるので、今後は多様な言い方が使われるかもしれない。今は「媒介者」という言葉を使っているが、それがいいというわけではなく、取りあえず「ホームクルス」や「メフィストフェレス」「ナウシカ」などを言葉にしようとする「媒介者」がいいのではないかと考えているだけで、絶対的にそれがいいと思っているわけではない。

Q2 レオの農業革命は、生命として正しい方向なのか

レオが畑作を奨励し、農業革命を起こすが、縄文時代と弥生時代を比較すると、生命としては正しい方向なのか。

(村瀬)

漫画のストーリーだけから言えば、レオが農業で皆を救おうとするのはあり得ないことだと思う。草を食べるだけではライオンなどは生きられない。肉のようなものがなければ、肉食の動物は満足できない。そこで先ほど、アルベルトという医者が人工肉を作ったと話した

が、農業だけでは救われないので、農業でできた大豆を加工する技術が必要であるという話。

そういう人工肉を作るという課題は、例えば、これから宇宙飛行士が月や火星へ行くというときに直面する問題である。あるいは、地球を回っている衛星の中で数ヶ月、中には1年間過ごす人もいるが、そこには動物がいないので、動物の肉の質量をもったものを作らなければならない。そういうものを作る技術をようやく手に入れられるようになったので、それをどう位置付けたらいいのか、私もよく分からないし、これから一緒に考えさせてほしいと思っている。

大学では、水曜日だけでも、そういう代替肉を昼食のメニューとして出して、食べてもらうようにしているし、実践的には、ハンバーグ等を作っている会社が人工肉を使い始めている。そのように、農業の産物ではなく、それを加工したものを食べるということがどういう意味を持つのかという問題であり、私もまだきちんと考えられていないので、考えていけたらと思う。

Q3 戦争体験が薄れる中で、想像性を発揮する作品は生まれるのか

戦争体験を背景にして『アドルフに告ぐ』『ブラック・ジャック』などの作品が生み出されているが、戦争の実体験が薄れつつあるなかで、手塚治虫や宮崎駿を超える想像性を発揮できる作品が出る可能性はあるのか。

(村瀬)

難しいと思う。多くの方は、手塚治虫や宮崎駿のような人はもう出ないと言っており、私もそうではないかと思う。ただ、それぞれが「小さな戦争体験」を持っているのではないかという気もしている。

「戦争体験」の有無は、殺し合うという部分もそうだが、食料がないことの問題を骨身に染みて考えているのかどうかに出てくると思う。食料がないとなったときに、「どう作ればいいのか」を考えているのが手塚治虫であり、宮崎駿もそういうものを考えようとしていた。そこを考えられなくなった人たちに凄い作品が作れるのかというと、難しいかと感じる。

しかしそれは、アニメも漫画も描いたことがない我々が、軽率に「出てくる」とも「出てこない」とも言えない問題ではないかとも思う。

Q4 iPS細胞の技術の基準は多様化するのか、収斂していくのか

iPS細胞を生み出した技術は、「デザイナー・ベビー」も可能にするということだが、技術の基準は多様化するのか、あるいは収斂していくのか。

(村瀬)

iPS細胞が作れるようになったり、代替肉を作れるようになったり、技術はとんでもない進化を遂げたと思う。したがって、そういう技術などは、これからアニメや漫画の発想の中に深く付加されていくのではないか。しかし、すでに手塚治虫のなかにはそういう発想で作られた漫画があるように思うので、新しいものが生まれてきたと考えるよりも、手塚治虫や宮崎駿の発想の地続きの上で考えてもらえると有難いと思う。

Q5 『鬼滅の刃』も日本的な発想のアニメだが、どのように感じられるか

手塚治虫の作品ではないが、『鬼滅の刃』も日本的な発想のアニメだと思う。これをどのように感じられるか。

(村瀬)

『鬼滅の刃』はおもしろかった。基本は、正常な人間がいろいろな事情で「鬼」になるという設定だが、本当にそうなのかというのを問いかけていると思う。「貴方たちは『自分は正常で、鬼の世界は異常な世界だ』と思っているが、それは近いのではないか」ということを、特に女性の作家が考えたことが凄いとっている。

Q6 アニメの奔放なストーリーは『古事記』に関係があるのか

アニメの奔放なストーリーは『古事記』にも関係があるのか。

(村瀬)

関係があると思う。手塚治虫は『古事記』の世界を『火の鳥』の「黎明編」や「ヤマト編」に使っている。ヤマタノオロチが出てきたり、戦争があったり、奇抜な物語を考えるには『古事記』の世界は最適で、宝庫なのだろうと思う。

Q7 ポストコロナ、アフターコロナで、本当のアーティストや芸術家は出現するのか

生きる根源がテーマになったのは戦争体験があったからだと思う。一方で、我々は戦争を体験していないが、戦争に匹敵するようなコロナ禍を体験している。しかし、情報が溢れるなかで、ポストコロナ、アフターコロナと言われながら、まだ芸術作品も含めて(手塚治虫の作品に)匹敵するような作品が出ていない。今後、ポストコロナ、アフターコロナで手塚治虫や宮崎駿のような本当のアーティスト、芸術家は出てくるのか。やはり戦争のような食や生の根源にアプローチされるような事象がなければ、そういうものは難しいのか。

(村瀬)

戦争体験は確かに物凄い体験で、手塚治虫は、岩波新書から出した『ぼくのマンガ人生』という本に、自分の戦争体験がいかに大変だったかということを書いている。宮崎駿は、最後の作品として『風立ちぬ』を作るが、父親の会社が飛行機の部品を作る会社で、戦闘用の飛行機の部品を作ることは、自分たちが食べていくためには必要不可欠な世界だったわけである。したがって、確かにそうと言える。

では、戦争体験がなければ、そういう作品はできないのかというと、『鬼滅の刃』の作者は、女性であることも含めて、「食べること」「食べられないこと」を根底的に考えられているように感じる。「鬼」や吸血鬼も血を吸わないと生きていけないという「食べること」がテーマであるときに、日本は豊かな世界に思われているけれども、じつは食べられない人たちがたくさんいること、まるで戦争下のような状態で、こども食堂をつくるなど、民間の人たちが助けているという状況のなかで細々と生きている人たちがいることを見つめる人がいたら、『鬼滅の刃』も含めて、手塚治虫や宮崎駿に匹敵するような作品は生まれてくると思う。

(質問者)

貧困は今後の社会テーマになると思うので、「食べる」という「生きる」ことに通じること、それから「心の貧困」もこれからはますます重要になると思う。そこを満たしていく芸術作品が生まれて、それを自分が働く図書館で広げていければと思った。勉強になった。

(村瀬)

イランで大きな地震があったときに、子どもたちが瓦礫の中で集まってワイワイ言いながら何かを見ていた。それが何だったかという、壊れた建物の中でテレビがついていて、そこに日本のサッカーのアニメが映っていた。それを子どもたちは見ていたのである。そういうテレビの中の「物語」でもある意味での子どもたちの栄養＝食べ物になるので、それを食べて飢えを凌いでいるところがあるかもしれない。

今、コロナ禍で小学校の給食がなくなり、子どもたちは午前中だけで下校しているが、日本では給食で飢えを凌いでいる子どもたちがいるという報道もなされているなかで、その給食がないという新学期の始まり方は何と恐ろしい話なのかと思った。給食は食べさせてほしいと思う。

Q8 科学と芸術の関係をどのように捉えているのか

ゲーテも科学者であり、同時に芸術家である。手塚治虫も医学を志したという意味で科学者であり、漫画家という意味では芸術家でもある。先生も人文科学という側面での研究者であると同時に、詩人的立場で芸術活動を行われている。科学と芸術の関係をどのように一般的に捉えられているのか、あるいは自身の活動に照らしてどのような関係として理解されているのか。

(村瀬)

難しい質問だが、私はそれほど難しいことを考えようとしているのではない。例えば、科学が説明していることを科学以外の言葉、日常の言葉、あるいは人文の言葉で説明できればいいと思っているだけである。

ただ、そのように科学が説明しようとしている言葉を、日常の言葉、人文の言葉で説明すると、非科学的だと思われるので遠慮してしまう、あるいは恥ずかしいから言わないということが、今の大きな問題ではないかと思う。

例えば、「コロナは病原菌だ」という言い方は科学の言葉だが、コロナ菌はどこから入ってくるかという鼻や口の粘膜である。とにかく粘膜のあるところに付いて侵入してくる。粘膜から異物が侵入するのは、コロナに限らず性的なものである。例えばコンサートやカラオケなどで興奮すると粘膜が活気づき、そこが潤ってくるとコロナ菌が侵入しやすくなる。したがって、たくさんの方が興奮するようなことは避けようというのがコロナ対策の形なのだが、それを人文の言葉で言うと、性的な状況を少し無くそうということになる。

ある動物園のゴリラの一家がコロナに感染したというニュースがあったが、ゴリラは粘膜を持っているので、粘膜を持っているものはすべてコロナが侵入する。侵入して、そこで

自分の子孫を残そうとする。それは人間が性行為をすることと変わらない。粘膜に取りついて、そこに自分の遺伝子を注入して増やそうとするからである。

そのように説明すると、性的で嫌らしいことを言っているように思われ、非科学的だと思われるかもしれないが、粘膜を通して侵入することをコロナが考えているのは、とても知的である。自分で子孫を作る材料を作らず、相手の身体の中の細胞を使って子孫を残そうとするのであるから、悪知恵も甚だしい。そういうことを考えているのは生き物であって、ウイルスも想像力を働かせているのだと思う。したがって、「ウイルスの性的な動きを皆で抑えよう」という人文の言葉の方が本当は分かりやすいと思うが、そういう言葉は遠ざけられているように思う。

Q9 パラリンピックの選手をアスリートとして受け止められるか、どう感じるか

『苦海浄土』の映像を含めて「メタモルフォーゼ」ときつい言葉で言えば「奇形」などが印象に残ったが、先日終了したパラリンピックの選手などは、まだ私自身も素直にアスリートとして受け止められていない心の内がある。そういうことについて、先生はどう感じられるか。あるいは、手塚治虫であればそれをどう描くだろうか。

(村瀬)

パラリンピックのことと『苦海浄土』の水俣の話と一緒にされたが、私もパラリンピックについては、出場する人は運動のできる人に限られていて、障害者を代表しているわけではないと思う。しかし、弓のようにしなる義足を付けてジャンプをしたり、車椅子でバスケットをしたりするのを見ると、あのようなことができるという想像力があの義足などを作り出していると思った。想像力を逞しくした人がパラリンピックに出られているのだと思う。

ところが、そういうことができない人もいる。パラリンピックにも出られない、重度で寝た切りの障害を持った人のことはどう考えたらいいのか。

『苦海浄土』を書かれた石牟礼さんの話の中に「ゆり」という水俣病になった女の子が出てくるが、その中でゆりの両親は「ゆりは少女のとても良い匂いがする。草木も良い匂いがするが、草木にも魂があるなら、ゆりにも魂があるはずだ」と言う。医者や新聞記者は「魂の抜け殻だ」と言うけれども、「本当にそうなのか」と母親が父親に語り掛けるシーンがある。それは想像力である。両親が「ゆりは草木のような良い匂いがする」と言うのは、想像力にも助けられながら「ゆり」の姿をきちんと捉えようとしているのである。

それは、言わばアスリートの世界である。目の見えない人と手を繋いで走る人がいるが、重度の障害を持った人にはそのように一緒に伴走してくれる人が要る。それは新聞記者でも医者でもなく、やはり両親である。一緒に走って「草木のような良い匂いがする」と言うこと自体がとても大事であり、それが人文の言葉で「メタモルフォーゼ」を語るということではないかと思っている。

<補足説明>

質問のし難いような話をしたのではないかと思うが、最後に補足として資料を1枚用意しているので、ご覧いただきたい。

手塚治虫が亡くなった後、2016年に娘のるみ子さんが手塚治虫の引き出しからエロティックな漫画をたくさん発見し、それを新潮社に持ち込んだ。それは冊子に掲載されたが、私はこれを持っていないので内容は知らない。一瞬で売り切れ、すぐに増版したようだが、それも一瞬にして売れたといういわくつきの冊子である。図書館なら見られるかもしれない。



新潮 2016年12月号
[雑誌] / 新潮社



『手塚治虫エロス
1000ページ』
INFAS パブリケーションズ

じつは、手塚治虫の「エロティック」については、手塚が描いたエロティックな場面や物語を網羅した『手塚治虫エロス 1000ページ』という上下巻からなる大型本がある。これは出版されているので入手可能である。宮崎駿はこのようなエロティックな作品を描かなかったが、手塚治虫はエロティックな作品をたくさん描いており、これをどう考えたらいいか。

私としては、生命が生き延びる術をいろいろな形で考えているものが生命の「メタモルフォーゼ」であるとする、それはすなわちとてもエロティックなものであり、生命体そのものがエロティックなものだと言えるとも思う。宮崎駿が手塚作品を嫌う理由は、フォルムが丸過ぎるという点にあり、丸い顔、丸い形で描かれているので、多くの作家は、それを子ども向けの漫画の技法だと言ってきた。しかしじつは、手塚治虫が丸い線で人物や動物を描くのは、生命の動きを描く、あるいは長い生命の物語を描くには、あのような丸みを帯びた線で描き足さなければ描き切れなかったからである。それは自ずとエロティックな線の描き方になる。

したがって、ことさらに『手塚治虫のエロティカ』とか、引き出しにあったからとか言うのは、手塚治虫の本性を見誤っているのではないかと思う。元々そういう方なのだろうと見るのが自然なのではないかと思うので、それを最後に付け加えさせていただきたい。

<著書の紹介>

(司会)

村瀬先生が最近上梓された本があるが、数年にわたって書かれた詩文百十数点が収められている。『生命詩文集 織姫 千手のあやとり』と題する本で、「織姫神話編」「生きもの編」「人編」「国家編」の4編からなっている。先ほどのお話とも関連すると思うが、詩は例えの豊かさを楽しむ、いわゆる例えとしての詩が一般的だが、今回の詩文集は趣を異にし、輪になって繋がっている生命世界を詠ったものを詩文形式で収録されている。少し硬い表現になるが、分析的に世界を捉える科学と、全体的に世界を把握する詩学の結合を試みられる大変に野心的な詩文集であると伺える。

ゲーテの思想と共鳴するところのある内容となっているので、推奨させていただく。先生から、タイトルなどについてもコメントを頂ければと思う。

(村瀬)

これはコーヒー1杯程度の金額で買えるようにと考えて手作りした詩文集で、定価 500 円、送料 200 円と書いているが、来週くらいに PDF でネット配信しようかと考えている。「村瀬学の小径」というホームページを立ち上げており、今はコロナ禍で休憩しているが、それを通してこの詩文集を PDF で配信するので、1 週間ほど経った後に「村瀬学の小径」を開いていただければ、この詩文集が読めるようになっていいると思う。冊子で見たいと思われる方は、申し込み先を PDF の後に紹介しておくので、それを見て申し込んでいただければお送りできると思っている。よろしくお願ひしたい。

(司会)

タイトルにある「織姫」あるいは「^{せんじゆ}千手」「あやとり」についてもコメントをいただきたい。

(村瀬)

モデルはゲーテの『神と世界』で、彼は亡くなる前にそういう詩集を作りたかったけれども、上手く作れず、それまでに書いたものを寄せ集めて『神と世界』という大きな詩集を作った。それに匹敵するようなものを作ろうと思った次第である。

その中に「織姫」という言葉が出てくるが、「生命はあやとり」というのが私の主張で、生命は「メタモルフォーゼ」でいろいろな型＝「あや」をとって生きている。怪物も奇形の人もそれぞれのあやとりをしているということである。それを「千手のあやとり」として考えるとどうなのかと考えてタイトルを付けた。そのあやとりをしているのが、じつは姫という存在、人文系で言う「織姫」である。科学では「織姫が生命の源にいる」とは考えないが、生命の源には「織姫」がいて、「織姫」は千手であやとりをしているという、そういうことを訴えようとしたのがこの作品である。

(司会)

ご関心の向きはアクセスしていただければと思う。興味深く考えさせられるお話をいただき、感謝申し上げたい。

発行日	2024年3月15日
講演著者	村瀬 学
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)